

児童雑誌『おもしろブック』に関する読者の研究

The study of loved readers (fan) concerning for “OMOSHIRO BOOK” (published by “SHUEISHA”) for children (from preschool children to elementary school children)

田中卓也
Takuya TANAKA

概要

1925（大正14）年に集英社は、老舗出版社であった小学館の「娯楽雑誌部門」として分離独立した。翌年に正式独立し、「明るく楽しい少年少女雑誌」をキャッチフレーズとして、これまでに多くの雑誌を発刊した¹⁾。戦後になり同誌は、おもに就学前の児童から小学校児童の男子・女子に購読されていた。誌面は戦前から存在した「小説」、「物語」のほか、マンガ、スポーツ記事や読者投稿欄なども設けられ、読者等の多くに“娯楽”の雰囲気を提供した。読者らが集った投稿欄は“文ちゃんクラブ”とよばれ、愛読者にも人気を博した。そこに集うことで読者らは、(編集)記者と交流を図ることや、愛読者仲間を見つけ出す機会となった。またマンガの主人公や、スポーツ選手等に憧憬し、読者等のなかには次第に“ヒーロー像”が確立されることになった。

かくして『おもしろブック』は、集英社より戦後の児童雑誌の転換期に登場し、児童読者の興味・関心が分化する流れの中で、対応することに迫られた。しかしながらテレビの放映開始、マンガの流行等大きな波が押し寄せる中で、幾度か誌面構成を変更することも余儀なくされた。しかしながら編集部は読者のことを最後まで忘れなかった。同誌は発刊後10数年間にわたり役割を果たし、次世代雑誌『少年ブック』にバトンを渡すことになる²⁾。

キーワード：集英社、児童雑誌、読者、「文ちゃんクラブ」、マンガ

Abstract

“SHUEISHA” was long-established publisher, wanted to be self-supporting accounting system of “SHOGAKUKAN” in 1925. It was official separated, be of a “cheerful and interesting, many boys and girls disposition of magazines” catchphrases, published many magazines. In the postwar days, the magazines had large circulation from preschool children to elementary school children. In the magazine, a (full-length) novel, popular literature, a historical novel, narrative long story etc which was appearing serially in those mag-

azines something else, a new phase of “MANGA” and sports articles provided opportunities for them to read their columns. It was created an destroy the atmosphere of popular (mass) entertainment.

The Reader’s column was called “BUNCHAN CLUB”, it was popular with readers (fan). Readers column was assenbled by readers and reporters exchanged between the human have became very active, other they got gain opportunities to find out models of other heroes and they tended to be attracted by heroines of “MANGA”, many sports athletes. In other readers, established one’s reputation (position) models of hero graduatly.

“OMOSHIRO BOOK” were published by “SHUEISHA”, In post war Japan was at a turning point (undergoing a transition) then. They were specialized of their interest and matter of concerned. It was in form of magazines articles of schedule was compelled (was obliged) remains changed (unaltered), greatly influenced by television, MANGA.

The editorial office of editors (OMOSHIRO BOOK) were memorable [an unforgettable things of many readers lately. It played an important parts of published about ten years later, It was passed (hand) the baton to the next generation of the magazines of “SHONEN BOOK”.

Keywords: SHUEISHA, Magazine for preschool children to elementary school children, Readers (fan), “BUNCHAN CLUB”, MANGA (cartoon)

目次

1. はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—
2. 集英社発刊の『おもしろブック』について
 - 2.1. 株式会社集英社について（編集方針）
 - 2.2. 『おもしろブック』の頁数と価格の推移
 - 2.3. 『おもしろブック』の表紙および誌面構成
3. 投書欄 “文ちゃんクラブ” につどう読者たち
 - 3.1. 投稿欄 “文ちゃんクラブ” の登場
 - 3.2. “文ちゃんクラブ” の読者層
 - 3.3. “文ちゃんクラブ” につどう読者の諸相
 - 3.4. 読者の「ヒーロー」像の確立
 - 3.5. 多くの少年読者の獲得—読者への「愛読者バッジ」の配布—
 - 3.6. 愛読者の共通語＝「ブックファン」（「われわれ」）という意識

4. “文ちゃんクラブ”の誌面構成の変化
 - 4.1. 投書欄の消滅と愛読者父兄の存在
 - 4.2. 読者共同体の分化と変容
 - 4.3. さらなる誌面の工夫・改良と振り回される読者の姿
5. おわりに —『少年ブック』への改称と読者の様相—

1. はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—

本研究は、第二次世界大戦後に集英社から出版された児童雑誌『おもしろブック』に光をあて、同誌の誌面内容および構成、さらに誌面に集うことになった子ども読者らの性格・特徴を見いだすことが目的である。同誌の幼年版として刊行された『幼年ブック』（1959年刊行）は、同誌では、「投稿欄」を設けていた「幼ちゃんクラブ」（のちに「幼ちゃんポスト」と改称）において投書家と編集者（幼ちゃん）が投書で交流を図った。また投書家は、「編集者」を幼ちゃんと気軽に呼び、近い距離で交流をともにした。また「投書家」らは誌面上で「幼年クラブ」を「幼ブ」と略して呼び、自らを「あいどくしゃ」もしくは「ファン」と称し、愛読者であることを宣言した³⁾。

すでに同誌では、読者共同体の形成がみられず、編集者と読者との交流が求められている。また略語の「幼ブ」、「愛読者」を「ファン」と称し、投稿欄のなかで読者が言葉を使用していることを見いだすことになった。

これまでに執筆者は明治期から昭和戦前期にかけて発刊されてきた児童雑誌に着目し、読者の性格や特徴について明らかにしてきた⁴⁾。そこでは、誌上で仲間を見つけ、交際し、次第に誌友同士の絆・結束を結ぶようになり、いわゆる「読者共同体」を形成したことを検証してきた。また投書欄を通じて、読者等の共同体「われわれ」というアイデンティティを見いだしたとされる⁵⁾。しかしながら戦後に発刊された児童雑誌においても読者共同体が存在したのかという問題は未だ残されているため、その問題を解明することを試みるものである。「読者」に焦点をあてた研究はこれまでに多くの蓄積が存在している。①今田絵里香『少女の社会史』では『少女の友』・『少女倶楽部』を対象とし、少女雑誌に示された「少女」の行為規範の変遷を明らかにしながら、読者が少女雑誌の提示する「少女」をいかにとらえ、受け入れたのかについて分析・考察を試みた。②本田和子『女学生の系譜』では女子学生の読者共同体の存在を指摘し、「少女幻想共同体」と名付けている。また川村邦光はその著書『オトメの祈り』において、明治後期の少女雑誌を考察し、投稿欄を通じて、女学生の資格の有無に関わらず、ペンネームを用いて『少女』という虚構集団を形成することを明らかにした。川村は「オトメ共同体」とその読者集団を呼称した。

執筆者はこれまで指摘されてこなかった戦後のわが国における「児童」に注目し、戦前

と戦後の児童雑誌の発行された背景を概観することで、当時の子ども読者の姿が浮かび上がってくると考える。本研究は、戦後のわが国の児童雑誌読者の研究の一端を明らかにするものといえよう。

なお、本研究は「近代日本における少年雑誌の普及と少年読者意識形成に関する歴史的研究」（「平成23年度文部科学省科学研究費助成事業科研費研究」【基盤研究C】＜課題番号：23531032＞、研究代表者：田中卓也）および「平成23年度吉備国際大学共同研究費」の研究成果の一部である。

2. 集英社発刊の『おもしろブック』について

2.1. 株式会社集英社について

集英社は東京都千代田区一ツ橋に本社を置く、大手出版社のひとつである。現在では、『週刊少年ジャンプ』（1969年7月～）、『りぼん』（1955年8月～）、『マーガレット』（1963年5月～）などをはじめとした男性・女性向け雑誌を多く手がけている。1925（大正14）年に小学館の娯楽雑誌部門として分離独立した。正式独立は1926（大正15）年のことであった。『おもしろブック』は1949（昭和24年）に発刊する。「明るく楽しい少年少女雑誌」をキャッチフレーズとして、株式会社集英社としての最初の創刊雑誌であった。『おもしろブック』創刊当時の様子について『集英社70年の歴史』のなかでは、次のように語られている⁶⁾。

新雑誌『おもしろブック』の創刊は、昭和二四年八月である。この発刊について創刊時の裏話を山川惣治氏は後にこう語っている。「『少年王者』の四集目『豹の老婆編』が出たころ、陶山氏がたずねてきた。今度、小学館の兄弟会社として集英社をおこし、『おもしろブック』という雑誌を出すことになった。ついては『少年王者』の続編を同誌に連載してほしいという話であった。私はそのとき、各集とも一二、三万部も売れているのは、今度はどうなるかと読者が待っているためで、雑誌に掲載すればそんなに売れなくなると思うからいやだとお断りした。まもなく陶山氏がまたおとずれて『少年王者』は一〇万部以上は必ず売れるとして、一冊分の原稿料を一〇万部の印税と同じに払えばいいかと言ってきた。私はそのとき、陶山氏の提案に感心した。同時に、新しい事業への氏の熱意に打たれた。内容を見ると、少年向けの娯楽雑誌と言いながらも、小学館の社風を映して非常に健康的であることがわかる。もちろん売り物の中心は『少年王者』だが、巻頭オールカラー一六ページの世界名作『参照年の駆虫旅行』は当時としては破天荒なアート紙を使ってきわめて美しく塩田英二郎の四色漫画『コックリくん』のヒューマンタッチ、杉浦茂のギャグ漫画『アップルジャム君』の鮮烈さなどは、すごく楽しいものであった。創刊号八万部は98%という売れ行きで、この評判は号をおうごとに高くなり、創刊して三年後

の二七年四月号はなんと三一万八〇〇〇部までに達し、少年雑誌のトップに立ってしまったのである

『おもしろブック』創刊には、『少年王者』で人気を博していた山川惣治、元小学館での多くの雑誌編集を手がけた経験を持つ陶山巖の存在が大きかったようである。「創刊号八万部は98%という売れ行きで、この評判は号をおうごとに高くなり、創刊して三年後の二七年四月号はなんと三一万八〇〇〇部までに達し、少年雑誌のトップに立ってしまった」とあるように、集英社の創業を賭けた同誌の出版は、ひとまず成功をおさめることになった。

2.2. 『おもしろブック』の頁数と価格の推移

集英社から刊行された『おもしろブック』は当初 A4 版で全 78 頁ほどのものであった。定価は 1 冊あたり 70 円（地方売価 74 円）であったとされる。時を経るごとに値段が上昇し、1950（昭和 25）年の 1 月、2 月号では、特価として 85 円～90 円で販売されていた。また頁数も増え、全 100 頁に至るまでになった。同年 4 月号では、特価 90 円になり、全 170 頁にまでになった。しばらくこの価格、紙幅であったが 1953（昭和 28）年 4 月号では、95 円（地方売価は 100 円）になり、全 250 頁と大幅に紙幅を増やすことになった。同年 6 月号では 100 円に、1956（昭和 31）年 1 月号では 110 円になった。頁数は変わらなかった。（時折 120 円になることも見られた）終刊間近となった 1959（昭和 34）年 5 月号では、120 円になり、終刊までこの値段が続いた。頁数は 210 頁程度にまで減少した。

2.3. 『おもしろブック』の表紙および誌面構成

同誌の表紙は、1949 年の販売当初のころは、男の子、女の子が 1 人ずつ掲載されていた。しかしながら 1953 年ごろから女の子が掲載されなくなり、男の子 1 人が掲載されるようになる。表紙に描かれている男の子はほぼ「笑顔」である。また男の子は「飛行機」や「兜」、「剣」などを持つなどしていることから、男子のイメージを持たせるものとなっていた。誌面構成はどうなっていたのか。以下に第 1 巻第 1 号の目次を見てみたい⁷⁾。

[目次]

- 表紙：少年王者（山川惣治）
- 傑作大名画集…………… 2

【大絵物語】

- 少年王者（山川惣治）…………… 11
- 空魔 X 団（小松崎茂）…………… 39
- ししのおんがえし（伊勢良夫え）…………… 10

【ゆかいな漫画】

- のんきなとうさん（麻生豊）……………36
- カラコロ島の冒険（松下井知夫）……………14
- バッキーがんばれ（小川哲男）……………34
- 助さん格さん（桂たろう）……………31
- まんがそんごくう（山根一二三）……………55
- 動物あいご（村田ひでお）……………36

【特別漫画 こっくりさん】（塩田英二郎）…23

【おもしろページ】

- 文ちゃんクラブ……………58
- とんち教室……………58
- お笑い教室……………58
- P・B・S教室……………64
- 野球熱（芝佳吉）……………46
- 知ったかぶり（泉朗朗）……………54
- なんにも仙人（原やすお画）……………60
- 黒面燈の怪人（押川春浪）……………72
- 青空少年（寒川光太郎）……………63
- こじき王子（田中良え）……………68
- 今年一番の大熱戦（永見七郎）……………48
- シールズ軍来る……………50
- 秋の六大学リーグ戦は？……………52
- 二ヶ月つづきの大懸賞……………53

<附録>

■半獣怪人

■打撃ゲーム版

人気作「少年王者」をはじめとする【大絵物語】、「のんきなとうさん」などをはじめとする【ゆかいな漫画】、「こっくりさん」の【特別漫画】のほかに「とんち教室」、「お笑い教室」などの【おもしろページ】に大きく誌面がわかれている。また【附録】も取り付けられていることがわかる。【漫画】に割かれているのが多くなっていることも当時の時代の流れであったのか。また「バッキーがんばれ」や「野球熱」、附録の「打撃ゲーム版」があるように、「野球」人気が高かったのであろうか「野球」に関する内容も見受けられるのである。こののち、誌面には「巨人南海漫画観戦記」（紙左馬）、「別当選手の少年時代」（永

見七郎)、「オール日本軍対大野球戦」(おもしろブック編集部)が登場することから、未来ある少年読者に野球に関心をもたせようとしていたようである。

では、約8年後に刊行された同誌(第8巻第2号)の誌面はどうなっていたのか。以下に見てみたい⁸⁾。

【目次】()内は頁数

- ・ <密林冒険> 「少年王者」……………山川惣治 (17)
- ・ <新諸国物語> 「オテナの塔」……………北村寿夫・南村喬え (78)
- ・ <痛快時代> 「変化左近」……………岡友彦 (5)
- ・ <少年プロレス> 「プロレス五郎」……………吉田竜夫 (45)
- ・ <海洋冒険> 「酋長タカシ」……………阿部和助 (98)
- ・ <痛快幕末> 「神剣魔剣」……………橋本たかお (110)
- ・ <純情熱血> 「醍醐天平」……………宇田野 武 (150)
- ・ <探偵冒険> 「恐怖の0・45」……………久米元一・深尾徹哉え (166)
- ・ <痛快時代> 「風雲剣士 桂小五郎」……………中澤経夫・柳瀬茂え (230)
- ・ <純情熱血> 「母よいずこ」……………梶野恵三・富賀正俊え (118)
- ・ <熱血探偵> 「どろんこ天使」……………小松崎茂 (89)
- ・ <怪奇探偵> 「怪魔山脈」……………西条八十・梁川剛一え (58)
- ・ <歴史物語> 「新少年太閤記」……………沙羅双樹・伊勢良夫え (209)
- ・ 「おもしろ映画館」…………… (53)
- ・ 【グラビア】 空手道場訪問 飛燕のはやわざ …… (25)
- 初場所優勝は？ 火をはく猛稽古 …… (27)
- ・ 「私は見た」
- ・ 「雪煙をあげて」…………… (190)
- ・ 「世界の珍談奇談集」…………… (57)
- ・ 「スポーツ一行知識」…………… 225)
- ・ 「おもしろとんち学校」…………… (129)
- ・ 「少年詩 よいこと」…………… (97)
- ・ 読者文芸欄 (詩・短歌・俳句) …… (226)
- ・ 「世界の動き」…………… (76)
- ・ 「うれしいたより」…………… (128)
- ・ 「愛読者バッジ贈呈者名簿」…………… (204)
- ・ 「文ちゃんクラブ」…………… (193)
- ・ 「二ヶ月つづき新型カメラ、五〇〇台あたる大懸賞」… (57)

- ・〈少年講談〉「ほまれの十字破り」……………(134)
- ・「プロレスの王者は誰か？」……………(96)
- ・〈名作冒険〉「少年西遊記」……………杉浦茂(38)
- ・〈探偵冒険〉「探偵探四郎」……………武内つなよし(106)
- ・〈熱血痛快〉「鉄腕太郎」……………古沢日出夫(29)
- ・〈幕末痛快〉「風の進がんばる」……………手塚治虫(177)
- ・〈痛快柔道〉「黒帯くん」……………高野てるよし(183)
- ・〈航空熱血〉「大空カンちゃん」……………わちさんぺい(145)
- ・〈痛快時代〉「白馬天狗」……………東村登(160)
- ・〈熱血空手〉「黒潮くん」……………木村一郎(218)
- ・〈時代痛快〉「流星剣士」……………うしおそうじ(70)

【大ふろく】

- 〈相撲〉「白星くん」(益子かつみ)
- 〈時代〉「白狐頭巾」(夢野凡夫)
- 〈柔道〉「風雲講道館」(梶原一騎・湯浅利八)
- 〈レスリング〉「火の玉小僧」(小林一夫)

頁数も随分増え、内容の項目も詳細かつ内容の濃いものとなっている。「少年王者」は昔と変わらず連載がされている。スポーツに関する内容のものも多く見られ、「野球」にかわり、グラビアの「初優勝は？火をはく猛稽古」や附録の「白星くん」にみられるような「相撲」、「プロレスの王者は誰か？」・【附録】の「火の玉小僧」に見られる「プロレス」、「黒帯くん」や「風雲講道館」などの「柔道」、「黒潮くん」の「空手」といったものが随所に見られるようになった。また作家執筆陣においても「少年王者」でお馴染みの「山川惣治」をはじめ、「西条八十」・「手塚治虫」・「梶原一騎」らが顔を揃えたことから、同誌を大量に売り込もうとした出版元集英社による商業主義戦略であったのかもしれない。

「マンガ」は多くの内容のなかで描かれるようになってきている。『おもしろブック』の誌面は、つねに時代の先端を追うように出版されており、いつの時代の少年らにも関心をもたせる誌面構成を考えていたのである。

3. 投書欄「文ちゃんクラブ」につどう読者たち

3.1. 投稿欄「文ちゃんクラブ」の登場

『おもしろブック』は創刊当初より終刊にいたるまで、読者の投稿欄を設けていた。名称も「文ちゃんクラブ」であり、終刊まで改称されていない。「文ちゃん」とは編集部の者

であると思われるが、正体はわかっていない。誌面においてもすべて「文ちゃん」の呼び名で通していた。およそ1頁ほどの紙幅であって、当初は3～4人程度であり、ピーク時には15人程度のことも存在した。読者からの投書に、編集部（文ちゃん）が回答するような形式を採用していた。この方法も一貫して変わらない。同誌第1巻第2号には「文ちゃんのあいさつ」が掲載されているので以下に紹介したい⁹⁾。

◇文ちゃんのあいさつ

ハロー、全国の皆さん。いよいよ天高く、勉強に運動に良い季節になりましたネ。いかがですか。『おもしろブック』のできばえは、記者先生がたも日本一の小学生雑誌だといってましたが、なるほど、そのとおりで、創刊号はおかげさまでぜんぶ売切れてしまいました。買いそこねたかたがたは、こん月から書店へもうしこんでおいてください

「ハロー、全国の皆さん」と読者によびかける「文ちゃん」の発言は、戦後のアメリカナイズされた観がうかがえる。戦前に出されていた少年・少女雑誌などでは「読者諸君」、「愛読者の皆様」などと丁寧な表現で使用されていたから、インフォーマル感が漂うのである。「日本一の小学生雑誌だといってました」とする編集部の記者の発言から、同誌は「小学生対象の雑誌」として考えられていたようである。先述の山川の発言にもあるよう、「8万部の98%の売れ行き」であったことから、販売状況もまずまず順調であった。

『おもしろブック』では、「懸賞」のコーナーも存在した。また「二ヶ月つづき大懸賞」という恒例の懸賞も行われていた。以下にその懸賞の一例を見てみたい¹⁰⁾。

☆おもしろブック二ヶ月つづき大懸賞

(問題)

こん月は、おもしろブック対オール日本軍の大野球の熱戦がありました。その時のおもしろブックのキャッチャーは誰でしょう。お知らせください。

さあ、投書のきそくをよくよんで、ひとりのこらず応募してください。当選者にはステキな賞品をさしあげます。

きそく・・・

◇締切 十月三十日

◇発表 『おもしろブック』来年二月号

◇答を書くようりょう

これは二ヶ月つづきですから、十一月号の問題を見てから、十月と十一月号についている投書券（二枚）をつけて、答も二つ書いておくこと。投書券がないと

無効です。

◇送り先

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ五

集英社『おもしろブック』懸賞係

読者に投書を求めることで、読者の獲得を狙っていたものと思われる。「当選者にはステキな賞品をさしかえます」とその文言あるように、「外れくじ」がないものかのように、読者に当選＝賞品をイメージさせるものとなっていった。

3.2. 文ちゃんクラブの読者層

「文ちゃんクラブ」には、どのような読者が集ったのであろうか。同誌第2巻第1号（1950年1月1日）を見てみたい¹¹⁾。

- ・新年あけましておめでとう。私は女でも『おもしろブック』の少年王者がすきでたまりません。このあいだ弟が本やから買ってくると、もう家中でひっぱりだこで、まるでけんかでもしてるよう。ようやく私がとったものの、どこから読んでいいやら、まよってしまいました。そこでお母さんが弟にまんがを読んでおやりとあったので、私はコックリくんを読んでやりましたが、読んでいるうちにおかしくて、おかしくておなかをかかえてしまいました。どうぞ先生方、もっと、もっとおもしろくしてください。(東京、尾花千恵子)
- ・ハロー、文ちゃん。十一月号はステキだったね、とにかくほかの雑誌は顔色なしですよ。本屋の店頭にならんでいるところは王者の感じですね。山奥の一読者として先生方に感謝しています。(山形 安部一雄)
- ・毎日毎日、働いていますが、仕事をしながらも少年王者のことばかり思っています。たくさん働いてお小遣いをもらって『おもしろブック』を買いに行くのがたのしみです。それで仕事がはげめます。正義の少年牧村真吾がんばれ。(岐阜、福井丈夫)

「私は女でも『おもしろブック』の少年王者がすきでたまりません」とあるように、同誌には女性の読者も存在していた。先述の今田は次のように述べている¹²⁾。

明治27年(1894年)の日清戦争、明治37年(1904年)の日露戦争の2つの戦争を契機として、明治20～30年代、産業界の支援とともに出版界も栄華をきわめ、新

しい出版社と雑誌が次々に誕生した。このように飛躍的に発展してきた出版界のなかから、まず、少年雑誌が、『少年園』（明治21年創刊）を皮切りに、博文館の『少年世界』（明治28年創刊）、実業之日本社の『日本少年』（明治39年創刊）、講談社の『少年倶楽部』（大正3年創刊）と、次々に誕生する。少女雑誌の登場は、少年雑誌の創刊からくらべると、やや遅れる。明治20年代前半までは、少年と少女は未分化で、たとえば、明治21年創刊の『少年園』に女子読者を排除する姿勢はみられないという（久米1997）。そののち、明治28年（1895年）9月、『少年世界』に「少女欄」が開設され、やがてそれが、少女雑誌誕生につながっていく（久米1997）。まず、金港堂の『少女界』（明治35年創刊）が最初の少女雑誌として売り出されると、大日本少女会の『日本の少女』（明治38年創刊）、近代時報社の『少女知識画報』（明治38年創刊）、そして、博文館の『少女世界』（明治39年創刊）と、続々と少女雑誌が誕生する

今田が述べているように、明治～昭和初期にかけて販売されていた少年雑誌に少女読者が存在したこともとくにおかしいことではなかったとあるように、『おもしろブック』のような雑誌においてもとくに問題はないようであったのであろう。『おもしろブック』の誌面においても、女子読者を排除する記述、行為は発表者が確認したところを見つけることはできなかった。また、「山奥の一読者」と自らを名乗る山形の安部一男や「毎日毎日、働いていますが、仕事をしながらも少年王者のことばかり思っている」岐阜にすまいのある福井丈夫のような読者もいることから、必ずしも読者層が「小学生読者」ばかりではないことも一見することができよう。「正義の見方 牧村真吾がんばれ！」と投書に記した福井は、きっと牧村に憧れ、ヒーローとして見ていたのであり、次号の雑誌が届くのが待ち遠しかったのではないかと思うのである。

また、投書のなかには「おもしろブックの歌」なるものを自ら作成し、投書を寄せる者もいた¹³⁾。

・おもしろブックの歌

(一) みんなかわいいおともだち

またあたらしくふえました

それはあかるく美しい

だれもがよろこぶおもしろブック

(二) さあさ、みんなでひらきましょう。

たのしいお家で読みましょう。

一には勉強、二に読書

読書はみんなのおもしろブック

(三) うれしいうれしいおもしろブック
たのしいたのしいおもしろブック
みんなでやさしくそだてましょう
おもしろブックよおもしろブック (福岡、鎌田定幸)

福岡の鎌田定幸は「おもしろブックの歌」の歌詞にもあるように、自分にとっても他の読者にとっても「だれもがよろこぶ」雑誌であることを願っていたようである。「一には勉強、二に読書」とあるように、『おもしろブック』を活用しながら、生徒の本分である勉強や読書について進んで取り組めるような生徒になることも求められたのであろう。この事例にあるような歌を投書するといった方法についても、戦前期から存在した雑誌にはよく見られたのである。とくに戦前期における幼年向け雑誌といわれた『幼年の友』（実業之日本社）、『幼年世界』（博文館）、『幼年倶楽部』（大日本雄弁会講談社）などの投稿欄の誌面には多くの幼年投書家らがこぞって投稿をしていたことは想像に難くないのである。

かくしてだれもが親しめる、口ずさむことができる歌詞の歌を投稿することは、むしろ投稿欄に脚を示す読者にとっては印象に残るものとなった。それにより読者同士がより絆を深めることにつながったのである。連帯感を強めた読者は、のちに読者共同体を形成することになったのは、これまでの多くの研究者が明らかにしてきたことであるので、稿を譲ることにしたい。しかしながら『おもしろブック』では、福岡の鎌田の歌のようなものが見られることはあったが、投稿欄「文ちゃんクラブ」のなかでともに連帯感を示すようなものにはなりえなかったようである。

3.3. “文ちゃんクラブ” につどう読者の諸相

『おもしろブック』は男性読者だけでなく、女性の読者も存在していたようである。同誌第2巻第4号（1950年4月1日）には以下のような読者も登場している¹⁴⁾。

- ・編集部のみなさん、御元気ですか。はじめておたよりします。きょう、やっと買ってきたので、弟とひっぱりあいながら中を見ると、少年王者や恐怖の仮面、白象君と黒スリ君、そのほか私の大好きなものばかり。とくにうれしかったのは、東西対抗の記事でした。女学生のくせに、とても野球が好きなんです。そこでさっそくですが、希望訪問をお願いがあるんです。それはジャイアンツの青田昇選手なの。お友達の間で私の青田ファンは有名で、私をよぶのに青田さんってよぶんです。たいへんなものでしょう。そしてね。もし青田さんに会って下さるのでしたら、今年は、もっとがんばってください。おつたえしてね。ぜひぜひお願いします。(静岡、中川小枝)

「女学生のくせに、とても野球が好きなんです。そこでさっそくですが、希望訪問にお願いがあるんです。それはジャイアンツの青田昇選手なの。お友達の間で私の青田ファンは有名で、私をよぶのに青田さんってよぶんです。たいへんなものでしょう。そしてね。もし青田さんに会って下さるのでしたら、今年は、もっとがんばってください。おつたえしてね。ぜひぜひお願いします」と語る「静岡」の「中川小枝」は、野球選手に恋い焦がれる女学生のひとりであったようである。「ジャイアンツ」に所属した名選手の「青田昇選手」のファンであった中川は、編集部（文ちゃん）に告白するとともに、青田さんに会わせてほしい、というようなニュアンスで青田本人との面会を考案するのである。「オトメ心」が全面に出ている投書である。無理なお願いであるとは知りながらも、中川はお願いするところに、投稿者と編集部の距離の近さを感じるのである。

また『おもしろクラブ』を読者の力で育てようとする少年読者も存在した¹⁵⁾。

- ・愛読者のみなさん。あいかわらず『おもしろブック』にしがみついているんでしょうね。ぼくは『おもしろブック』をつうじて、全国のみなさんとともに、りっぱなものにしたいと思います。そのためには、編集部をうごかして、ぼくたちの作品をのせていただきましょう。おもしろブックをぼくたちで育てましょう。(福島、遠藤英雄)

「福島」の「遠藤英雄」の投書である。『おもしろブック』を読者と協力しながら、みんな育てるなかで「編集部をうごかして、ぼくたちの作品をのせていただきましょう」と書き上げている。投書家遠藤のように、「文ちゃんクラブ」に投書が掲載されることはひとつのステータスになっていたのかもしれない。掲載されるために編集部をうごかす、といったいかにも幼い子どもの発想を編集部に申し述べたものである。読者は「掲載のお願い」についても、堂々と編集部に対し投書するような者も少なくなかったと思われるのである。明治期より博文館が刊行していた『幼年世界』の読者投稿欄にも、読者と編集者の距離の近さを伺わせる投書があるので、以下に紹介しておきたい¹⁶⁾。

▲チリンチリン。もしもし、うそ八百番の記者先生。僕の投書を没書にすると、タンクにのつて、先生をつぶしてしまひますよ（釧路、根本畜男）

▲おい、給仕。僕のを没書にすると飛行船にのつて行つてばくだんをおとすぞ。もし当選してくれれば僕の飛行船にのせてやらう、わかつたか（千葉 田中忠男）

『幼年世界』の投稿欄の一節である。「僕の投書を没書にすると、タンクにのつて、先生をつぶしてしまひますよ」と過激な発言をする読者らの投書である。子ども読者らにとって作品が雑誌に掲載されことは誇りであったにちがいない。雑誌掲載こそが誇りであった

読者らはなかば「脅し」ともとれる発言で、こぞって投書したのであろう。なかでも「当選してくれれば僕の飛行船にのせてやらう」と子ども心の優しさを伺わせる一面も見えるところがなんともほほえましいが、子ども読者にとって過剰なまでにメダルを獲得することがこのうえない喜びになっていた。

かくして、『おもしろブック』にも見られた読者と編集部との近距離の関係は、殊にめずらしいものではなく、わが国における戦前期の幼年雑誌などにも見られていた。読者は投書することで、立場からは一線を画していたといわれる編集者との距離をより近いものとし、投稿者自らの存在を認識してもらうのみならず、誌面への掲載許可（容認）したり、「褒美」（たとえば「メダル」など）などをもらうことで、自らのステータスとして誇りに感じたのである。また編集者は読者との距離を近く取りながら、さらなる読者の獲得をめざすことになった。

少年雑誌のみならず、少女雑誌においても投稿欄は、読者同士の交流の場（サロン）であった。嵯峨景子は「読者投稿文にみる『美文』の出現と『少女』規範—吉屋信子『花物語』以前の文章表現をめぐって—」（『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』No. 80、2011年）において、その内容について以下に述べている¹⁷⁾。

『少年世界』から派生した『少女世界』は、『少年世界』同様主筆を巖谷小波が務めている。雑誌の巻頭には巖谷小波による小説が掲載され、他には口絵写真や少女小説、読者参加型の投稿欄なども設けられていた。想定読者層は高等小学校から高等女学校の低学年頃の若い読者層で、平均的には13歳から15歳くらいまでの少女が多かったと思われる。『少女世界』には「少女会館」という名の読者投稿欄が設けられており、その中身は「学芸室」「顧問室」「娯楽室」「談話室」と4つの部門に分かれている。「学芸室」は文芸投稿欄で、短文や短歌・俳句などが掲載されていた。(中略)「顧問室」は読者が編集者に宛てた質問に答えるコーナー、「娯楽室」はクイズが出される娯楽性の強いコンテンツとなっている。「談話室」は読者欄で、読者同士の交流や交際が行われる場として人気を集めた。

「想定読者層は高等小学校から高等女学校の低学年頃の若い読者層で、平均的には13歳から15歳くらいまでの少女が多かったと思われる。『少女世界』には「少女会館」という名の読者投稿欄が設けられており、その中身は「学芸室」「顧問室」「娯楽室」「談話室」と4つの部門に分かれている。「学芸室」は文芸投稿欄で、短文や短歌・俳句などが掲載されていた」とあるように、少年雑誌においても少女雑誌においても、投書欄は読者の意思表示の場として大切な場所であった。多くの読者獲得は、「投書欄」の充実するか否かにも関わっていたものと考えることができよう。

3.4. 読者の「ヒーロー」像の確立

同誌に集った読者は、次第に自らの「ヒーロー」を語った投書を送るようになる。以下にその投書内容を見てみよう¹⁸⁾。

- ・文ちゃん、こんにちは。ぼくは五月号から愛読者になりました。なぜかとうと、少年王者の真吾はターザンより強いとか話し合っているんで、五月号を月ずえにかえてみると、これはなんとスバラシイ本ではないか。これでみんながよろこぶのもあたりまえだと思いました。ぼくもこれから愛読者をふやしていきます。(愛媛県西条市永見長谷、藤井健三)
- ・ぼくたちの学校は、いまとてもスポーツがさかんです。べんきょうのおわりのベルがなると、五年と六年の男の生徒は、運動場で野球の試合をはじめます。女の生徒は、じぶんの組を勝たせるために、プレー、プレーとにぎやかなおうえんがっせんをはじめます。受け持ちの先生も、わざわざきて、しんぱんをつとめてくれます。ぼくは、大きくなったら、川上選手のような野球の名人になりたいと思います。(千葉県西小学校 佐野喜春)
- ・ぼくはいま、お友だちの清田君と、夏休みになったら、海でおよぎをならって、どちらがはやくじょうずになるかと、さかんにじぶんのことをじまんしています。清田君もぼくも、ほんとうはまだたいしておよげないのですが、古橋選手になったような気もちで、休みじゅうおよごうとはりきっています。もちろん、べんきょうのほうもなまけずにやりますよ。(大分県竹田市竹田小学校 首藤紘一郎)

「少年王者の真吾」をはじめ「(野球の)川上選手」や「古橋(弘之進)選手」といったように、具体的なヒーローを挙げ、憧憬・憧れを抱いていることがうかがえる。投書家は、そのヒーローにすこしでも近づこうと努力している様子も見て取れよう。また投稿家の彼等はずねに当然のこのように「べんきょう」・「運動」(スポーツ)をがんばろうとする「文武両道」に意欲を示す者でもあった。

3.5. 多くの少年読者の獲得—読者への「愛読者バッジ」の配布—

『おもしろブック』では、1953年を迎えた頃から、愛読者を中心に「バッジ」を配布していくようになった。読者のなかには、「バッジ」をもらっての感想を述べる者も存在していた¹⁹⁾。

- ・文ちゃん、お元気?ぼくはついに「愛読者バッジ」を手に入れることができたよ。なんかうれしくうれしくてたまりません。これからもずっと愛読者でいます。(三重、加

藤忠生)

「愛読者バッジ」は毎号誌面にも紹介されていくことになった。以下にその紹介文の一例を見てみたい²⁰⁾。

さあ、早くもうしこもう！おもしろブックの愛読者バッジ

◎下に付いている愛読者バッジ・クーポン（ひきかえ券）をきりとって、五枚ためて（同じ月のでもかまいません）送料十円をいれておくってください。

◎じぶんの住所なまえはハッキリわかりやすく書いてください。バッジをお送りするための送料十円をかならずいれておくってください。

◎本誌二一二ページに「愛読者バッジ」をあげるかたのなまえがのっています。

愛読者にバッジを配布するためには、雑誌についていた「クーポン」を「5枚ためる」必要があった。「クーポン」は集英社の雑誌に1冊1枚付いていたようであり、集英社刊行雑誌を多く購入させることで、バッジというご褒美を渡していたものと考えられる。この方法を鑑みても、出版社集英社による商業主義政策が見え隠れするのである。「愛読者バッジ」を授与された者については、姓名を誌面で公表されるため、読者らの目の届くところとなった。これによりさらなる読者の仲間（知人）をも読者にしようとする方策が取られたものと考えられる。

3.6. 愛読者の共通の言葉＝「ブックファン」（「われわれ」という意識

「文ちゃんクラブ」に投稿する愛読者が使用する共通の言葉がうかがえることになる。『おもしろブック』を略して「ブック」と呼ぶようになっていた²¹⁾。

- ・文ちゃん、自分でよんだブックは、あとで学校図書館にきふします。みんなよろこびますよ。ではお元気で（宮城、渡邊健一）
- ・ぼくは、沖縄の小学生です。ずっと愛読しています。沖縄はいまは、日本のものではなくかなしくてしかたがない。ブックだけが内地のにおいをつたえてくれる。ぼくたちがまた日本とひとつになる日まで、みなさん、文ちゃん、ほんとうになかよくしてください。（那覇、高江州健二郎）
- ・全国のブックファンのしょくん！あつくなりましたネ。ブックの読者からおたよりがあつまって、つくえの上がまるで山のよう。でもネ、それははりあいがあってうれしいそがしさだから、ボクもがんばっていますよ。（文ちゃん）

『おもしろブック』を自らが読んだ後、学校図書館に寄付した心優しい「宮城」の「渡邊健一」も、沖縄にすみながら、寂しい気持ちをつねに同誌を読むことで励まされ、いつも心のよりどころとしていたであろう「高江州健二郎」らは「ブック」といかにも愛読者の共通語として使用しているかのようである。読者だけでなく、「文ちゃん」でさえ、「ブック」という言葉を使用しているを考えると、読者と編集者における共通認識となっていたのではないかと推測する。また文ちゃんは愛読者のことを「ブックファン」とも表現していることから、「ブックファン」という言葉の使用（称すること）で、愛読者仲間のメルクマールになっていたのではなかろうか。

4. 文ちゃんクラブの誌面構成の変化

4.1. 投書欄の消滅と意読者父兄の存在

『おもしろブック』（第5巻第8号、1953年7月1日）の発刊の頃より、文ちゃんクラブの構成に変更が見られるようになった。「文ちゃんクラブ」は全15頁ほどに（143～158頁の紙幅に）なり、そのなかに「文ちゃんだより」、「ノーシボル教室」、「読者文芸欄」、「文ちゃんの作家訪問」、「学校だより」、「全国じまんと笑いはなし」、「文ちゃんニュース」というように分かれている。投書を寄せる読者に対し、直接作家らとの「文通」を読者個々にすすめるようなことを行うようになった。それは、「おたより下さい」欄（同誌第6巻第8号、1954年8月1日）に見られる。同欄は「○○を好きな人」という項目でまとめられ、求めている者の「住所」と「氏名」を誌面に公表・掲載した。このことは投書欄における「読者共同体」の消滅（崩壊）を意味するものと気付くのである²²⁾。

☆愛読者の父兄・保護者のみなさまに

『おもしろブック』は、あかるい健康な、見てたのしく読んでおもしろい、健全な少年雑誌を目標に編集されています。

<おもしろブックの特長>

- 一、『おもしろブック』の表紙、口絵は、調和した美しい色彩を使用し、つとめて毒々しい色調をさけて、少年の美的感覚を育てています。
- 二、グラビヤ写真は、多方面に健康的な題材をとりあげています。
- 三、小説などの読み物は、一流作家が執筆しており、たのしみながらおもしろく読めて自然に知性を高め、情操をゆたかにするようしており、社会性を重視し、残酷的なものや、好戦的なもの、人権を無視するようなものは極力排して、お子様が安心して読めるようになっています。
- 四、絵物語・漫画も、一流作家が執筆して、質的向上につとめており、特に時代絵物

語は一流作家の名作をえらんでおり、漫画はその教育性を重視して、特に主題と扱い方に注意し、健康で闊達な想像力をやしなうように留意しています。

五、創作のほかに、お子さま方が望んでいる世界の新しくめずらしいニュースや、感激実話・訪問観察記事などの、知識をひろめるとともに、物事を正しく観察し判断する力を養う読み物がたくさんあります。

六、お子さまの視覚を大切に、大きな活字を使用し、漢字は教科書にもとづき平易なものを選び、読みやすくしてあります。

七、附録は健全なものを選び、また実用的なものをいろいろ工夫しています。

『おもしろブック』には、少年期の成長に大切な、右のような特長があります。『おもしろブック』は創刊以来、みなさまからご好評をいただいておりますが、大切なお子様のために、父兄や保護者の方の御意見を伺って、もっともっとよい少年雑誌にしたいと思っております。どうぞ忌憚のないご感想やご批評をおよせくださるようお願いいたします。

「おもしろブック編集部」

『おもしろブック』は、読者にとっての「少年期の成長に大切な」雑誌であり得ようとした。また子ども読者のみならず、読者の父兄（保護者）らにも同誌の主旨・方針などの理解について得ることに努めた。『おもしろブック』は創刊以来、みなさまからご好評をいただいておりますが、大切なお子様のために、父兄や保護者の方の御意見を伺って、もっともっとよい少年雑誌にしたいと思っております。どうぞ忌憚のないご感想やご批評をおよせくださるようお願いいたします」との文言がそれを証明するものである。読者の獲得には、父兄にも信頼を得ることが必要となることを編集部は十分に承知していた。しかしながら、編集部は読者とその父兄の信頼をより一層得ようとしたため、現状の編集方針・計画がやや不明瞭になりはじめていたことで、方針の徹底を図ろうと引き締めようとしたのではないだろうか。

雑誌のほか当時には、新たなマス＝メディアとしてラジオやテレビが家庭に普及しはじめようとしていたこともあり、各雑誌社は、雑誌の売り上げを伸ばすことにより同誌編集部は神経を使うようになっていたのである。

4.2. 読者共同体の分化と変容

時代を経て、『おもしろブック』における誌面も次第に様変わりするようになった。近年誌面に新しく設けられた「グループ通信」欄には、以下のような、愛読者のなかで、とりわけ興味や関心をもったグループ会員（メンバー）募集の告知が掲載されるようになった。すでに「文ちゃんクラブ」での投稿は、文ちゃんおよび編集部宛のものに限定されており、読者同士の交流を図るため、編集部は以下のようなものを掲載した。以下にその記

述を見てみることにする²³⁾。

☆『おもしろブック』の愛読者のかたがたが、いろいろのグループをつくりました。みなさんもブック・ファンとだけのグループをつくって、文ちゃんのところまでしらせてくださいね。

■『文ちゃん友の会』をつくりました。入会希望の方は、大阪市西淀川区野田町三一
千葉武

■『文芸愛好会』を結成しました。滋賀県彦根市芹橋町十一丁目一 西田誠吾

■『切手収集の会』をつくりました。大阪市西成区南神合町五二 中野和也

■『漫画研究友の会』をつくりました。群馬県桐生市宮前町二ノ一九一九
小川忠一

■『さくら文通友の会』をつくりました。大阪市城東区新喜多町三ノ五五
砂山太一

■『級友会』をつくりました。秋田県仙北郡淀川村小種福部羅 佐藤博

■『スタンプ会』をつくりました。沖縄前原地区美里村泡瀬一区八班（二葉）
桑江亨

■『文通友の会』をつくりました。静岡県清水市上清水三〇五 白井政夫
千葉県八日市場区局内八日市場四三三 田村宜光

愛読者同士の誌面での交流がこれまでほとんどみられなかったが、編集部は、読者同士の交流を図ることを考案した。編集部では読者共同体を誌面での交流とはせず、読者個人で交流を図れるようなしくみを構築した。戦前期の児童雑誌においても、読者共同体の変容における状況は見られた。戦前の雑誌の投書欄に戻ろうとしたのであろうか。作品などの投書については、引き続き直接作家のすまい（居住先）に送付できるようになっていて、個人情報の全公開がなされていたことになる。

愛読者のなかには、さらに「雑誌しらべ」を行い、『おもしろブック』が読者に支持されていることの報告をするとともに、読者でない者に対して、読者になるよう進めるということも行われていた。以下にその事情について見てみたい²⁴⁾。

【雑誌しらべ】

◎右の表はぼくたちの組で、みなが買っている雑誌をしらべて見ました。和歌山県五四西
月中学校 新家昭也

おもしろブック 八名 冒険王 五名 中学生の友 五名 少女 四名 ぼくら
二名

◎左の表は、ぼくたちの組の人が買っている雑誌をしらべたものです。まだ『おもしろブック』を買っていない人におすすめしたいと思っています 新潟県岩塚中学校 中井善次郎

おもしろブック (9名) 中学生の友 (6名) 少女 (5名) 中学生コース (4名)
少女ブック (4名) 買っていない人 (11名)

『中学生の友』や『中学生コース』といった雑誌名が出ている。読者の中には小学生のみならず、年長であった中学生も存在していた。小学生時代から継続していた読者の一人であったのか。また集英社が同じく刊行している『少女ブック』についても購読する者も存在している。元来編集部が企図していた小学生以外にも、この時期になると中学生も読者層を構成するようになっていたことが考えられよう。

読者獲得を求められる集英社は同誌第8巻第4号より、キャッチフレーズであった「明るく楽しい少年少女雑誌」の文言を一時的に消している。相次ぐ誌面の再構成もふくむ、『おもしろブック』の存続と編集方針にブレが生じ始めていたのかもしれない。

4.3. さらなる誌面の工夫・改良と振り回される読者の姿

1956(昭和31)年頃になると、同誌はさらなる誌面の工夫を行うようになった。まずは、「少年記者」の募集であった。同誌第8巻第9号(1956年9月1日)には「みなさんは少年記者になれます」という項目が設けられ、つぎのようなものになっていた²⁵⁾。

おもしろブックでは、今少年記者を募集しています。これは全国のみなさんが、ひとりでも、あるいは友だちといっしょでもいいから、記者になって町や学校などのおもしろいニュースをおくってくれるしくみです。その記事と名前を本誌にのせます。

<少年記者の名前>

静岡県 奥林経郷 石原孝彦 二橋洋子

東京都 佐々木博 城正彦 松崎建二

そのほか大ぜいのみなさんが少年記者です

「記者になって町や学校などのおもしろいニュースをおくってくれるしくみです。その記事と名前を本誌にのせます」と広告しているところに、すでに読者の連帯感を感じられない。さらなる読者獲得をめざしたのかと思われる企画である。また、同誌の誌面改良は続いた²⁶⁾。

☆おもしろブック電話局は毎週土曜日の午後0時より午後三時までひらいています。

この日にはまんが家の先生が、きておられますから、みなさんとじかにお話ができます。

☆下の番号にかけて、読者ですがおもしろくブック編集部へ・・・といってください。
そしてみなさんがおもしろブックにのせてほしいとおもうことを記者とお話ししましょう。東京九段 (33) 1125-1129

読者が興味・関心をもつ作品を手がける「作家」と直接電話でお話ができるという「おもしろブック電話局」のコーナーの設置である。作者と直接話ができるという夢のような企画を同誌は持ち込んだのである。どのくらいそのようなことが行われたのかは不明であるが、集英社の社運をかけて行われたものと推測できる。「少年記者のページ」についても、読者獲得策のひとつであったと思われる。「少年記者」は、現在でいう「読者モデル」や「読者モニター」的存在であったのか。少年記者になった者は「少年記者証」を頂けるしくみになっていた。しかしながら同誌第11巻第5号（1959年5月号）では、廃止したと読者に伝えられる様子が見られることになった。

いろいろな企画に翻弄されながら、読者は同誌を愛読し続けた。しかしながら、いずれも長続きしない企画倒れのものとなっていた。その後「ぼくもよんでるブックのなかま」欄も登場したが、おたよりコーナーと内容が重なっていたりして、「読者共同体」などはそこからうかがえない。また「おたよりニュース 先生がんばれ」欄も登場するようになるが、いつしか読者を中心としたものから、先生を励ますコーナーに読者を投書させるようなものになっていた。読者の母校を自慢する「校歌コーナー」も設けられたが、やがてはページ記載欄に移動することになり、多くの誌面は割かれることはなかった。編集部が誌面に工夫をするものの、苦戦していたのである。

誌面改良の極めつけは、「記者先生と少年記者の対話」である。以下にその内容について見てみよう²⁷⁾。

■森下：記者先生こんにちは。おもしろブックで少年記者を募集しているとききましたが、少年記者でどんなことをするのですか？

◎記者：少年記者とは、おもしろブックの読者なら、だれでもなれるもので、じぶんの家や、住所や、近所や、町や村や学校のニュースやじけんや写真、スケッチなどを編集部におくってもらっておもしろブックの少年記者のページにのせるしくみです。

■森下：そのほかには？

◎記者：座談会などにでてもらって、本誌でどこかを訪問するときなどいっしょにきてもらったりすることもあります。また編集部から、ブックのいいところやわる

いところについてお友だちの考えをしらべてもらうようにおたのみすることもあります。

■森下：少年記者になるにはどうしたらいいのですか？

◎記者：読者になりたいと思う人は、住所、なまえ、学校名、学年、とくいな学科と、できたらじぶんの写真を同封して編集部へ送って下さい。

■森下：あて名は？

◎記者：東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三集英社おもしろブック編集部少年記者係です。

■森下：特典はありますか？

◎記者：もう少し人数がふえたら、少年記者バッチやうつくしい記者証をつくってさしあげます。東京に少年記者本部や地方の各県に支部をつくったり、記者クラブなどもつくりたいと考えます。

■森下：それではさっそくぼくも少年記者になります。

◎記者：OK。では全国のみなさん、ふるって敏腕なる少年記者になってください。編集部に今まで少年記者になりたいとおたよりをくれたひとは、こんどは記事に書いてきてください。来月からはいよいよ少年記者のみなさんの記事や写真をのせたいと思います

少年記者の「森下」が記者にインタビューを試み、「少年記者」の仕事内容、企画モノへの参加、特典などが話されているのがうかがえる。「少年記者」になった者は、同誌で紹介されているが、「少年記者」が相当数いたようには思えない。むしろ読者が記者に振り回されているように見てとれる。もはや読者自らがすすんで同士の交流をはかるものではなく、誌面を利用して読者を獲得することに必死であったのである。以前同誌が行っていたように「明るく楽しい少年雑誌」フレーズが復活（第11巻第5号、1959年5月1日）をはたし、昔に回帰するのかと思いきや、突如、『おもしろブック』の終刊が訪れることになる。

5. おわりにー『少年ブック』への改称と読者の様相ー

同誌第11巻第15号（1959年12月1日号）において10年続いた『おもしろブック』の終刊が報じられた。その内容は以下のとおりである²⁸⁾。

「おもしろブックは来月新年号から【少年ブック】と名まえがかわります。

◎なぜ、『おもしろブック』は『少年ブック』と名まえがかわるのか？

☆『少年ブック』はジェット時代の新しい少年がほこりをもってよめる日本ではじめての豪華な少年雑誌です！

■みなさんが毎月よんでいる少年雑誌は、どれもこれもおんなじみたいで、かわりばえがしないでしょ？ところが『少年ブック』は、そんな中でただひとつ新しい、表紙をみただけでハッとするような新時代の雑誌です。学校の先生もおうちのかたがたにも喜んでいただける明るい少年雑誌です。

☆『少年ブック』の連載読物・漫画はだんぜん日本一です！！

■漫画はおもしろくて、しかも長いものばかり！！

■小説は有名な先生方ばかりの豪華一流陣！！

☆『少年ブック』は世界中のおもしろい話や新しい話題がのっている、家中そろって楽しめる少年雑誌です。

■おもしろくてわかりやすい科学特集

■ラジオ・テレビでもわからぬスゴイ内容のスポーツ記事

■すぐに役立つ実用記事

■大懸賞・写真ページ

■そのほかいっぱい！！

「みなさんが毎月よんでいる少年雑誌は、どれもこれもおんなじみたいで、かわりばえがしないでしょ？ところが『少年ブック』は、そんな中でただひとつ新しい、表紙をみただけでハッとするような新時代の雑誌です。学校の先生もおうちのかたがたにも喜んでいただける明るい少年雑誌です」と発刊の理由を挙げている編集者サイドも誌面工夫に頭を悩ませていた事情がうかがえる。「『少年ブック』はジェット時代の新しい少年がほこりをもってよめる日本ではじめての豪華な少年雑誌です！」と豪語しているところに、読者等の期待を誘う雰囲気をかもしだしているのである。「漫画はおもしろくて長いものばかり！！」「ラジオ・テレビでもわからぬスゴイ内容のスポーツ記事」などの文言から、つねに流行（の最先端）を追わなければ、という編集者側の意向が読み取れる。また「日本一」の雑誌にするために『おもしろブック』ではすでに対応できない、ことについてもうかがえるのである。

しかしながら、同社は読者を大切にしていたことは一貫してうかがえた。『おもしろブック』時にも「読者投稿欄」として「文ちゃんクラブ」は登場し、ほぼ終刊までとぎれることなく続いてきた。『少年ブック』に改称してからも、「文ちゃんクラブ」は存続したようである。読者を振り回しながらも読者のことを決して忘れない誌面作りを行った。誌面では、「野球」、「柔道」、「剣道」、「プロレス」の話題を中心にとりあげ、新しい情報を伝達する役割をもち、流行していた「マンガ」も早くから取り入れた。しかし創刊当初から掲載さ

れていた長編小説「少年王者」の人気作品も存在したことから、長編物、マンガの誌面の問題や、読者コーナーの誌面での問題などに編集部は悩まされた。そのなかでも読者投稿欄「文ちゃんクラブ」は、終刊まで続き、読者、記者交流の場として長らく存在した。読者は編集者のさまざまな企画にふりまわされながらも、読者を大切にする編集部の意向は貫かれて、投稿欄はいわば安住の地として守られることになった。

『おもしろブック』読者は、小学生とりわけ1年生から4年生を対象とした雑誌として登場したが、実際は小学生から中学生がおもな読者層であり、時折女子学生の投書も見られたように、少年少女雑誌であった。その読者らは、「文ちゃんクラブ」にさまざまなかたちで投書が行われた。「われらの校歌」、「わたしたちの町むら」のコーナーでは、読者が通う学校の校歌を紹介したり、出身地の紹介などをおこなうコーナーであるが、地元の読者を学校単位、地域単位などでさらに獲得したいとする強い意図が見受けられる。

さまざまな読者が存在していながら、共通のメルクマールを保持していた。それは読者自らが（愛読者という意味での英語（カタカナ）表記の「ブックファン」と名乗り、誌面で交流を求めたことである。また編集者を「文ちゃん」と称し、愛着をもったことであった。読者は誌面で交流を求めようとしたが、作家には直接コミュニケーションをとらせる方策を行った。また同誌の愛読者は、誌面上ではなく誌面の外で交流を図るような「◎◎会」を称した会などをそれぞれで結成したり、文通交換を目的とする投稿者のために関心のある者に住所を知らせることもなった。同誌の読者共同体は、誌面をこえたところで形成され分化していくことになったのである。

「おもしろブック」という名称は、『少年ブック』に変わるまで、一貫して使用された。「ユーモア悩み教室」や「わらいのいずみ」、「こっけい和歌」「わらいばなし」などのコーナーなどが存在しタイトルのごとく、「おもしろさ」の要素をふくみながらも、学習教材としての側面は存続しつづけた。「お国自慢」コーナーや詩・短歌・俳句などのコーナーを誌面上に設定し、読者に投稿させた。審査をする作家は「選後評」のところで、審査コメントを残しているが、優秀作品を褒めるのみならず、剽窃行為に及んだ者に対しては、誌面上で注意を促した。「叱る」という子どもの教育についても怠らなかったのである。数回にとどまらず、毎回のごとくこのようなコメントが存在したことから、剽窃行為をしてまでも賞品がほしかった当時の読者の気持ちが汲み取れる。すなわち読者にとって、誌面に作品が掲載されることは「榮譽」であり、誇りになった。

『おもしろブック』は、集英社より戦後の児童雑誌の転換期に登場し、児童読者の興味・関心が分化する流れの中で、対応することに迫られた。しかしながらテレビ、マンガの大きな波がおしよせるなかで、幾度か誌面構成を変更することになったが、読者のことを最後まで忘れなかった。同誌は発刊後10数年間にわたり役割を果たし次世代雑誌『少年ブック』にバトンを渡すことになった。

【註】

- 1) 田中卓也「『少年ブック』における読者に関する研究——前身雑誌『おもしろブック』の読者の影響を中心に——」（日本幼児教育学会第19回口頭発表済、2010年9月29日）。
しかしながら、『少年ブック』の読者に関する性格・特徴などについては精緻な分析・考察ができていない。
- 2) たとえば、『幼年ブック』における読者の研究（日本保育学会第64回大会ポスター演題発表、於玉川大学、2011年5月24日）、同「戦後における児童雑誌の光と影——大日本雄弁会講談社刊『幼年クラブ』を中心に——」（平成24年度日本児童文学学会中部支部例会秋季例会、於：中京大学名古屋キャンパス0号館6F会議室）口頭発表済、2012年9月24日）、同「集英社刊行児童雑誌『少女ブック』の誌面構成と読者の様相」日本幼児教育学会第20回大会（駒沢女子短期大学）口頭発表済、2012年9月25日）などがある。このような投書欄の傾向が見られるものには、集英社刊行雑誌『少年ブック』、『少女ブック』、『幼年ブック』などの各誌や、先述した小学館の学年別学習雑誌などがこれに該当する。
- 3) 「集英社小史」によれば、1949年に発刊された『おもしろブック』は、のちに『少年ブック』誌に改称された後、1969（昭和44）年にマンガ雑誌であり爆発的な売れ行きを記録した『少年ジャンプ』に生まれ変わることになる。『少年ジャンプ』は多くの人気マンガを世にうみだし、現在もなお人気を得ている週刊少年マンガ雑誌のひとつである。「週刊少年ジャンプ」に関する研究としては、斎藤次郎『子どもと教育少年ジャンプの時代』（岩波書店、1996年）が存在する。
- 4) これまでに執筆者は、「近代児童雑誌における読者の研究——『金の船』を中心に——」（中国四国教育学会『教育学研究紀要』第58巻第1部（教育学部門、CD-ROM版、2007年3月）、同「近代児童雑誌『金の船』・『金の星』における作品選者群像——子ども読者とのかかわりを中心に——」（中国四国教育学会『教育学研究紀要』第59巻第1号（教育学部門、CD-ROM版、2008年3月）を論述した。当時の『少年倶楽部』、『少年世界』などの人気雑誌に多くの読者を奪われていたものの、純粋から高貴なイメージをもつ「よい子」を読者の対象とした。ほかには「近代児童雑誌の子ども読者投書欄および読者意識に関する研究——実業之日本社刊行雑誌『幼年の友』と東京博文館刊行雑誌『幼年世界』の子ども読者を中心に——」（日本幼児教育学会『幼児教育学研究』第17号、2010年6月30日）、「近代少年雑誌『少年界』にみる読者共同体に関する研究」『関西教育学会年報』（通巻第35号、2010年6月30日）などがある。
- 5) 岡谷英明「『幼年雑誌』における読者共同体の教育史的意義」（『日本の教育史学』第36集、東京法令、1996年）。
- 6) 集英社70年の歴史編纂室編『集英社70年の歴史』集英社、1995年、41～44頁。
- 7) 「（創刊号の）目次」『おもしろブック』創刊号（1948年10月25日号）、集英社。大阪府立中央図書館国際児童文学館所蔵。
- 8) 「（第8巻第2号の）目次」同誌第8巻第2号（1956年2月1日号）。
- 9) 「文ちゃんのあいさつ」同誌第1巻第2号（1948年10月1日号）。
- 10) 「懸賞のお知らせ」同誌第1巻第11号、（1949年7月1日号）。
- 11) 「文ちゃんクラブ」同誌第2巻第1号（1950年1月1日号）。
- 12) 今田絵里香「少女雑誌にみる近代少女像の変遷」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』（2000年12月）。
- 13) 「おもしろブックの歌」「文ちゃんクラブ」（『おもしろブック』第2巻第6号、（1950年6月1日号））。
- 14) 「文ちゃんクラブ」同誌第2巻第4号（1950年4月1日号）。
- 15) 同上。

- 16) 前掲4) 拙稿「近代児童雑誌の子ども読者投書欄および読者意識に関する研究—実業之日本社刊行雑誌『幼年の友』と東京博文館刊行雑誌『幼年世界』の子ども読者を中心に—」を参照されたい。
- 17) 嵯峨景子「読者投稿文にみる『美文』の出現と『少女』規範—吉屋信子『花物語』以前の文章表現をめぐる—」(『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』No. 80、2011年)。
- 18) 「文ちゃんクラブ」同誌第5巻第4号(1953年4月1日号、藤井投書文)および「文ちゃんクラブ」(「みなさんのおたより」欄)同誌第7巻第9号(1955年8月1日号、佐野・首藤投書文)。
- 19) 同上。
- 20) 同上。
- 21) 「文ちゃんクラブ」同誌第5巻第6号(1953年6月1日号)。
- 22) 「愛読者の父兄・保護者のみなさまに」同誌第7巻第8号(1955年7月1日号)。
- 23) 「グループ通信」同誌第8巻第4号(1956年4月1日号)。
- 24) 「雑誌しらべ」(同誌第8巻第1号、1956年1月1日号)。
- 25) 「みなさんは少年記者になれます」同誌第8巻第9号(1956年9月1日号)。
- 26) 「おもしろブック電話局のお知らせ」同誌第8巻10号(1956年10月1日号)。
- 27) 「記者先生と少年記者の対話」同誌第9巻第2号(1957年2月1日号)。
- 28) 「おもしろブックは来月新年号から【少年ブック】と名まえが変わります」同誌第11巻第15号(1959年12月1日号)。

【付記】

なお、本稿は2011年9月22日に口頭発表を行った「日本幼児教育学会第17回大会」(於：駒沢女子短期大学)の内容のものに若干の加筆・修正を加えたものである。